

深イ〜話!

No.71

—みやざき中央新聞「命の使い方を知った人生の旅」より—

「こんな人生もあるのか」と、『メッセンジャー』という雑誌に載っていた佐藤誠司さんの生きざまを読みながら、思った。

幼少の頃は父親から毎日のように虐待を受けていた。ほうきやゴルフクラブが折れるほど殴られた。小学校高学年になる頃には、痛みも怖さも感じない子供になっていた。

中学時代は不良仲間とつるみ、校内暴力を扇動していた。200人対300人、2つの中学校の不良グループの一触即発のケンカのときは4人の仲間で仲裁に入った。

2校の500人は佐藤さんたち4人を恐れて何もできなかった。

新聞やテレビで「500人の不良グループのケンカをたった4人で仲裁」と話題になった。

それを見た他県の不良グループがケンカを売りに来たが、すべて暴力で押さえつけ、気が付いたら佐藤さんは2000人の不良グループの頂点にいた。

19歳のとき、初めて将来のことを考えた。付き合っていた彼女と本気で結婚したいと思ったのだ。しかし、やんちゃな佐藤さんとの結婚を相手の両親が認めるはずはなかった。

佐藤さんは不良グループから足を洗って昼も夜も働き、結婚資金を貯めた。彼女も貧しい生活を一緒に耐えた。

人生の岐路は21歳のときに訪れた。

一カ月後に結婚式を控えていたある日のこと、佐藤さんは、高圧ケーブルの測定の仕事をしていて、電源を止めていたので安全なはずだった。ところが、上司が誤って電源を入れてしまった。6600ボルトの電流が佐藤さんを5メートルも吹き飛ばした。全身火だるまになった。

救命救急センターで「必ず君を助ける」という医師の言葉を聞いて、気を失った。

全身の3分の1をやけどすると助からない時代に、50%のやけどを負った佐藤さんは1か月後に意識を取り戻した。主治医にお礼を言おうとしたら、母親から信じられない話を聞いた。

主治医のN先生は、三日三晩、寝ずに治療にあたり、四日目の夜、家族を呼んで「腫れが引いたので明日手術をします」と言って帰宅したそうだ。その帰り、駅のホームで倒れて、そのまま亡くなったという。

「俺が殺した」と佐藤さんは思った。

婚約者の彼女は、全身を包帯でぐるぐる巻きにされ、天井を見るだけの佐藤さんを懸命に介護した。

ある日、あどけない笑顔で婚姻届を持ってきた彼女に佐藤さんは、「もう二度と来ないでくれ」と言って追い返した。彼女の欄は全部記入され、印鑑も押されていた。嬉しかったが、これを受け取ると、この子は幸せになれないと思った。

手術は50回を数えた。日本で初めて、世界で初めて、そんな手術を何度も行った。医師たちは「どうすれば社会復帰できるか」これだけを懸命に考えていた。

かなり回復して、歩けるようになったある日のこと、看護師から、16歳の男の子がバイクの事故で大やけどをして入院してきたという話を聞いた。

その子が病室に入ってきた。一目見て、「俺よりひどい」と佐藤さんは思った。

「俺は21歳で将来を失くしたけど、この子は16歳で失くした。俺にとって16歳から21歳は人生で一番楽しかったのに、この子は・・・」、そう思ったら泣けて泣けて仕方がなかった。

出会いから27年の歳月が流れた。やけどの先輩・後輩はそれぞれ48歳・43歳になった。あの時は「将来を失くした」と思っていたが、2人は今それぞれに全国各地で自分の人生を語り、多くの人に生きる勇気と希望を与えている。

「自分の体をさらけ出すことで『死にたい』と思っている人が、『もう少し生きてみようかな』と思ってくれたら、この命と引き換えに天国に逝ったN先生に恩返しができる」

本当の命の使い方を知った人生の旅を、佐藤さんも古市さん（前述の16歳で全身大やけどを負った）も今、ばく進中だ。

